



国史跡 万富東大寺瓦窯跡 発掘調査現場公開資料

令和7年3月1日（土） 於・万富東大寺瓦窯跡（発掘調査現場）
岡山市教育委員会・岡山市埋蔵文化財センター

史跡万富東大寺瓦窯跡の概要

国史跡万富東大寺瓦窯跡は、岡山市東区瀬戸町万富に所在しています。この遺跡は、約850年前の鎌倉時代初頭、源平合戦の一場面である治承4（1180）年の「南都焼き討ち」によって焼け落ちた東大寺の再建のため、俊乗房重源が主導となり瓦を焼いた窯跡として著名です。昭和2（1927）年に史跡指定を受けました。遺跡は、大寺山地区と上の山地区に分布し、昭和54（1979）年に岡山県教育委員会、平成13・14（2001・2002）年に瀬戸町教育委員会によって発掘調査、科学探査が行われました。その結果、瓦窯は少なくとも14基存在することが判明したとともに、管理棟と考えられる礎石建物跡や工房など関連する遺構の存在が明らかになりました。

発掘調査の概要

岡山市教育委員会では、瓦窯の規模・形態や史跡指定範囲内の遺構分布状況など、将来的な史跡整備を見据えた遺跡の情報や性格を把握するために、令和3年度から継続して範囲確認調査を実施しています。調査は、既往の調査との整合性を確認しつつ、指定範囲内の詳細が不明な地点の発掘調査を行いながら、遺跡の全容把握に努めています。これまでの調査の結果、大寺山地区の南側に14基の瓦窯が存在することや、その瓦窯の規模・形態など、瓦窯の詳細な情報が明らかになってきました。



図1 万富東大寺瓦窯跡と周辺の遺跡

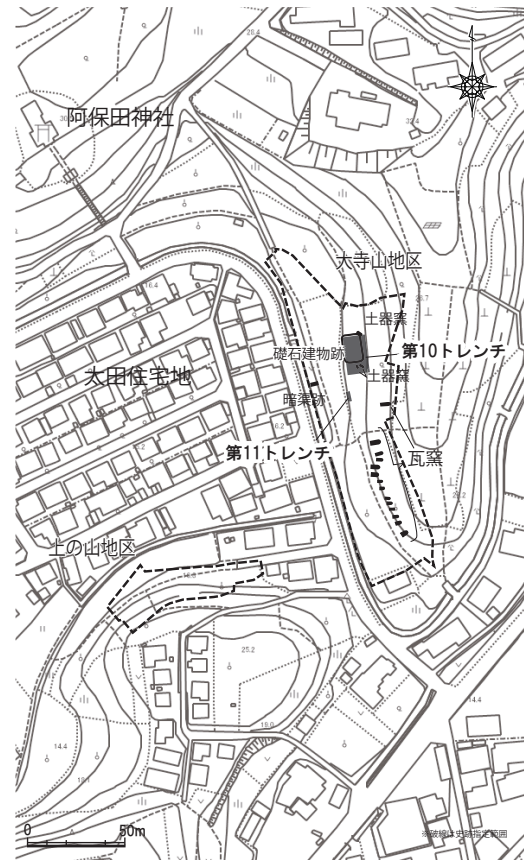


図2 遺構配置と今年度の調査区

令和6年度調査成果

今年度は大寺山地区内の北側に2つの調査区を設定し、調査を行っています。

○第10トレンチ

礎石建物・土器窯の再検出と、未調査地点との関係性を把握・再検討するために設定したトレンチです。

礎石建物跡（図3）

過去に検出された南北方向に並ぶ4点の礎石に加えて、新たに南端の礎石から西側に並ぶ礎石を1点確認しました。また、礎石の間に束石も確認しました。礎石建物の規模は、溝に切り込まれ、正確に捉えることはできませんが、検出礎石と建物の外側を囲むように、地山を切り込んでいる状況を鑑みると、桁行4間以上、梁行2間以上の規模の建物と捉えることができます。礎石間の距離〔心々距離〕は、2.15 mで、礎石と束石の距離は、1.05 m～1.1 mとなります。

土器窯

窖窯（あながま）〔SO-3〕、平窯（ひらがま）〔SO-4〕と呼ばれる構造が異なる2基の土器焼成窯を再検出しました。平窯〔SO-4〕は、炎の通りをよくするための畦（あぜ）を持つ点が特徴です。これらの窯の操業に伴う灰原は、第10トレンチの中で広範囲にみられます。

その他の遺構

ほかに、柱穴や杭跡を数点確認しました。また、トレンチ西端では、昨年度に引き続き、瓦列を確認しました。

○第11トレンチ

昨年度に検出した瓦窯の灰原の続きを把握するために設定したトレンチです。14号瓦窯に伴う可能性のある灰原を確認しました。また、トレンチ西壁中央付近には、落ち込み部分に削り出した地山由来の土を入れ、整地をした痕跡が確認できます。

西暦	和暦	事項
1180	治承四	源平の争乱で東大寺が焼ける。以仁王が平氏追討の令旨を発する。源頼朝が挙兵。
1181	治承五 養和元	重源、造東大寺勸進職に任命される。大仏の螺髪を鑄始める。 平清盛が死去（64歳）。
1185	元暦二 文治元	「壇ノ浦の戦い」で平氏が滅びる。 東大寺大仏開眼供養。
1186	文治二	周防国が東大寺造営料国となる。翌年より、柚から木材を切り出す。
1187	文治三	源頼朝、東大寺復興の木材運搬を妨害しないよう周防国の地頭に命ずる。 この頃、周防阿弥陀寺創建。重源、備前国荒野開発の妨害停止を奏上。
1190	建久元	東大寺大仏殿上棟。
1192	建久三	後白河法皇が死去。播磨国大部荘を東大寺領として復興し、播磨浄土寺を建てる。
1193	建久四	播磨国・備前国が東大寺造営料国となる。
1195	建久六	大仏殿・中門などが完成。東大寺供養が行われる。重源、大和尚号を得る。
1196	建久七	魚住泊・大和田泊の改修計画が認められ、国衙に協力が命じられる。 東大寺大仏殿の石の脇土像、四天王像、中門の石獅子などがつくられる。
1199	正治元	源頼朝が死去。
1203	建仁三	東大寺総供養。『備前国麦進未進納所惣散用帳』に万富産の瓦を示す「吉岡御瓦」の語句あり。 重源、『南無阿弥陀仏作善集』作成。翌年、東大寺東塔の造立を開始。
1206	建永元	重源、東大寺浄土堂で死去（86歳）。

表1 東大寺再建関係略年表

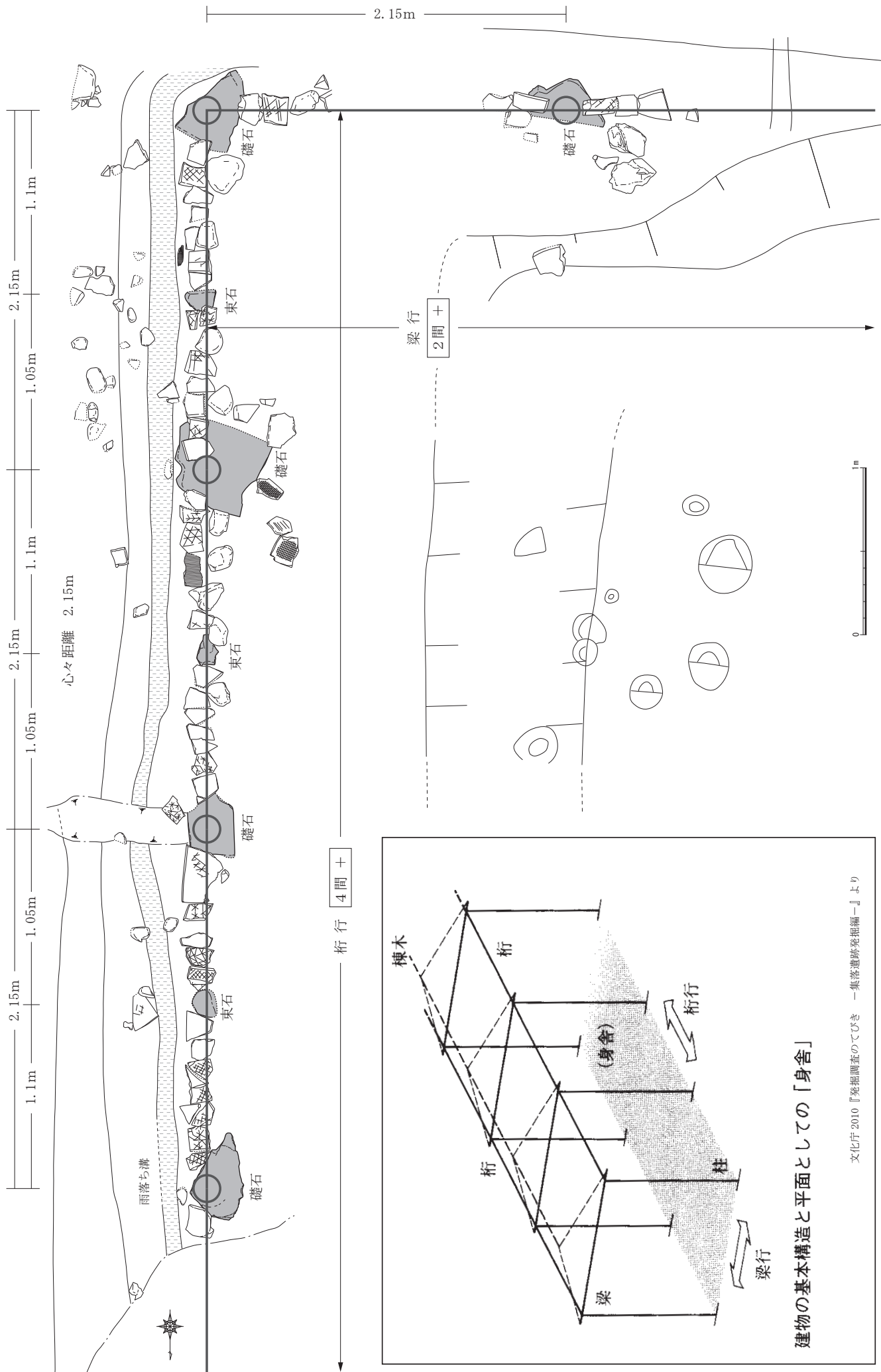


図3 礎石建物跡とその規模

文化庁 2010 『発掘調査のてびき 一集落遺跡発掘編一』より

建物の基本構造と平面としての「身舎」

<出土遺物>

瓦窯で焼かれた平瓦に加えて、土器窯の灰原から須恵質の椀・播鉢、土師質の甕・鉢・壺・鍋脚・播鉢、瓦質の鍋脚などが多く出土しました。

ほかに、土錘や礎石建物跡よりもはるかに古い、古墳時代の須恵器や埴輪も出土しました。

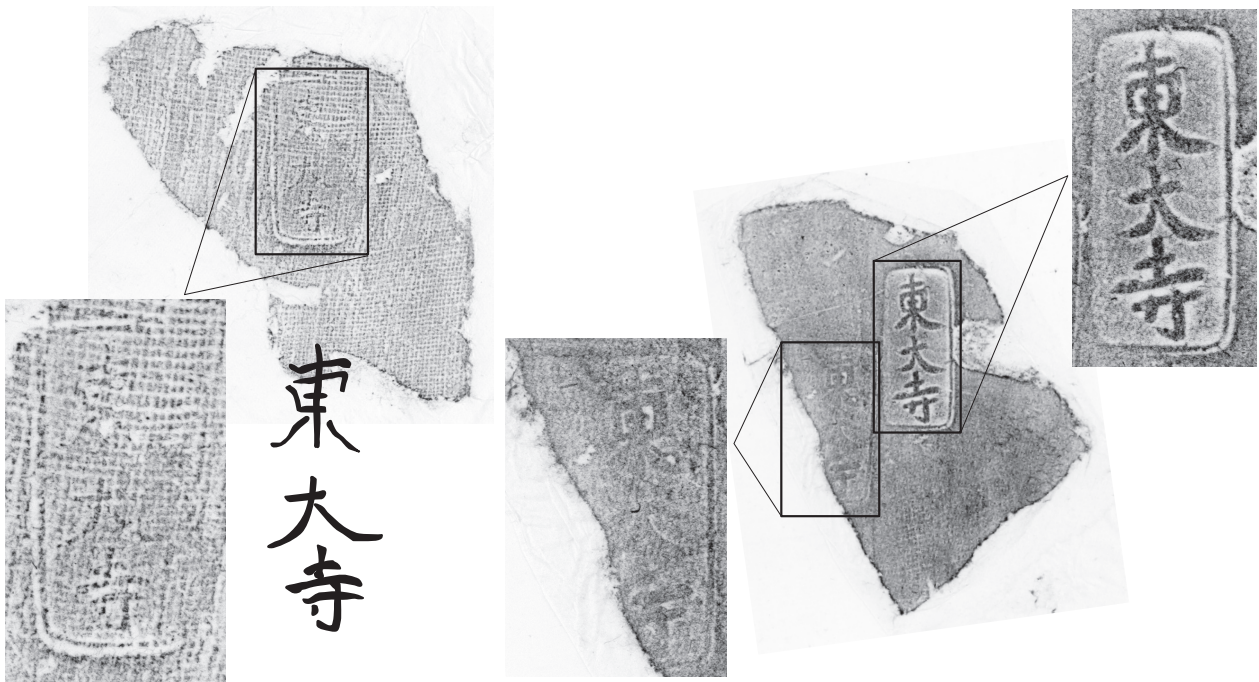


図4 「東大寺」刻印をもつ平瓦



岡山市教育委員会広報専門官「こらぼん」

今年度の調査では、瓦窯で焼かれた平瓦のうち、「東大寺」の刻印が入った破片は3点見つかりました。拓本をして記録をとると、「東大寺」の刻印も同じフォントを使っていないことが分かります。また、遺物を見るだけでは、なかなか気づくことのできない“隠れ”「東大寺」も見つかりました。

〇まとめ

今年度の調査を通して、瓦窯以外の遺構の実態や性格などが明らかになりました。従来、管理棟として考えられていた、礎石建物跡については、地山を削りだす工法や礎石間に東石や瓦列を定める点などを考慮すると「仏堂」としての性格が考えられます。土器窯については、灰原内の遺物や構造や被熱の痕跡の違いから、異なった質の土器を焼いていたと捉えることができます。

また、礎石建物と瓦窯、土器窯、瓦列の関係性については、古い順から、

瓦窯の操業→礎石建物の造営→礎石建物の廃絶→覆土の掘り込み→土器窯の操業→→瓦列
と捉えることができます。

今後、礎石建物の類例などから礎石建物の構造を探るとともに、来年度以降も史跡指定範囲内の遺構の構成や分布、関係性などを明らかにするための調査を継続して行う予定です。